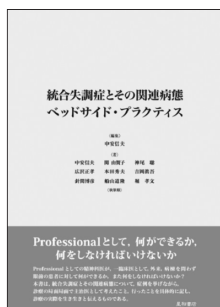


## ■ 書 評



### 統合失調症とその関連病態：ベッドサイド・プラクティス

中安信夫 編  
 中安信夫, 関由賀子,  
 神尾 聡, ほか著  
 星和書店 2012年5月  
 304頁, 定価 7,140円

DSM-5の話題が耳に伝わるたびに、操作的診断基準の意義を認識しつつも、それが人為的かつ表面的に思えて、臨床の現場にそぐわぬものであるように感じられる方も少なくはないであろう。誰もが実施できるように作られた操作的診断基準やアルゴリズム治療ガイドラインが隆盛を極め、そして多職種チームによる医療が重視される中、精神科医にしか、精神科医でなければできないことが、次第に不明瞭になってきているといえる。そのあたりの事情を海外の精神科医に尋ねてみると、いずれも歯切れの悪い返事ばかりで、そのうち精神科医は不要な存在になってしまうのではないかと危機感と不安を覚える。

本書は、精神科医がプロフェッショナルとして患者に対して何ができるのか、何をしなければならないのかを、統合失調症とその関連病態を対象として「腕の見せどころ」を毅然と著している。

病歴の聴取とその記録方法、状態像および疾患診断に関わる手順、経験証拠（臨床経験のみならず成書や論文を通して得た知識をも含む、腕を磨き身につけた技）と適応に基づく治療についての総論部分に引き続き、統合失調症は初期、急性期、慢性期に分けて、関連病態は広汎性発達障害、思春期妄想症、いわゆる急性精神病、初老期・老年期の精神病、さらには抗精神病薬の副作用とその対応方法が取り上げられ、合計33例にのぼる詳細な症例呈示に沿って、症状や徴候のとらえ方、

診断、治療に至る診療技法が、生き生きとした筆致で具体的に述べられている。

統合失調症の診療に関して、その病期や関連病態とともに、精神科医が遭遇するであろう数多くの場面も網羅されており、病棟での慢性期患者の引き継ぎにおける「とくに医師が新たにその病院に赴任する際には、医療的には医師であるが、コミュニティでは『新参者』であり、医師はこの両面で患者と職員から信頼を得る必要に迫られる」などは秀逸であろう。

どの章にも通底するのは、単に「疾患」をみるのではなく眼前の「患者」を診て、その「患者」にとって最適な治療を施すという「臨床医」本来の姿であり、それは操作的診断やアルゴリズムのみでは到底なしえず、総論に述べられた一連の丹念な作業に裏打ちされた職人技の上に成り立つものであろう。

一方で、薬剤併用を上級医から厳しく戒められてきた若手の精神科医にとっては、本書に掲げられた薬物療法については、その実施には幾分勇気がいると感じる者もいるであろう。背景をなす理論的事項は必要に応じて略記するに留めるとの本書の方針ではあるが、より詳細な記載が望まれたように思われる。また、各章の症例呈示の記述が、総論に述べられた方法に則りさらに統一がなされていると、カルテの記載法のよりよい具体的な手本になったと思われる。

本書は、臨床現場で常に真摯な姿勢で患者、家族、とりまく環境につぶさに目を配り、逐一それらを頭に焼きつけた医師にしか著しえないような内容に満ちた、まさに「ベッドサイド・プラクティス」の書であるといえよう。

(根本隆洋)